

Cyber-shot F505K journey around HAWAII

南方



憧憬

ハワイで探した
エデンの原像

撮影&レポート=田中希美男



※上の写真は画像3枚を使ってパノラマ化しています



上の写真は画像2枚を使ってパノラマ化しています

家ではさまざまな家電製品に囲まれ、外へ出れば華やかな商店街やアミューズメントスポット—科学技術文明を享受する私たちですが、なぜかいつも、心の片隅で「もの足りなさ」を感じてはいないでしょうか？

とくに孤独ということもなく、具体的に何が不満というわけでもない。けれども、抑えきれない「渇き」を感じて、人々は海や山や、見も知らぬ外国へ旅するのもかもしれません。この「渇き」の正体は何なのか。古来、多く

の文学者や芸術家たちがその答えを求め続けてきました。

文明社会は、一方で虚飾と欺瞞に満ちている、進歩することは本当に善いことなのか、人類はどこかで間違った選択をしたのではないか—。旧約聖書の「エデンの園」の物語は、この問題をもっとも端的に表しているようです。なまじ知恵を持ち、言葉を知ったばかりに、アダムとイブは楽園を追われてしまったのですから。



果実が実り、色鮮やかな花々が咲き乱れる楽園

「ポリネシアン・トライアングル」——ハワイ諸島とニュージーランド、そしてイースター島を結ぶ南太平洋の広大な三角形の海域に散らばる宝石のような島々。きらめく陽光の下、色鮮やかな花々が咲きみだれ、果実が実り、一年中ほとんど裸に近い姿で暮らす純朴で健康的な原住民。15世紀から17世紀全般にかけての大航海時代に、初めてこれらの島々に出会ったヨーロッパ人は、そこに大昔に失ったはずの「楽園」を発見したのでした。

それ以来、文明生活に疲れた多くの人々が「癒し」を求めてポリネシアを訪れるようになりました。

友人や家族との葛藤の末、すべてを捨ててタヒチに移住したポール・ゴーギャンは、しかし、ただ楽園を賛美するのではなく、人間存在の意味を深く問う作品を描き続けました。心臓発作で急死する5年前に描かれた「わ

れわれは何処から来たのか、われわれは何者か、われわれは何処へ行くのか」や、「野蛮の豪奢」を描いたという「ネヴァーモア」は、進歩の対極にある価値を問いかけ、見る者の心を揺さぶります。

スコットランドの作家、ロバート・ルイス・スティーブンソンは、傑作「宝島」や「ジキルとハイド」で世界的な名声を得ましたが、腐敗したヨーロッパ社会を嫌い、喘息の療養も兼ねて、晩年をサモアで暮らしました。しかし、持ち前の正義感は、彼に安穏な日々を送ることを許さず、植民地支配のあり方をめぐって統治国のドイツやアメリカ、イギリス政府を痛烈に批判し、囚われていた酋長たちの釈放運動を展開したりしています。原住民にはツシトラ（物語酋長）と呼ばれ、今も慕われています。日本の作家・中島敦が

この時代のスティーブンソンを主人公に「光と風と夢」という小説を書いています。

太平洋戦争の敗戦後、奇跡の経済復興を遂げた日本人にとっては、ポリネシアの最北・ハワイが、最大の「楽園」になりました。日系人が多数定住し、毎冬多くの芸能人が訪れ、ゴルフ、サーフィン、ショッピングに興じるリゾート……煩雑な日常から解放されて思いっきりストレス発散したい気持ちもよくわかりますが、今回は少し視点を変えて、かつてゴーギャンらが憧憬した「南海の楽園」の面影をたどり、基本的には今も変わらないはずの、本来の魅力を探訪してみよう——そんなつもりでレンズを向けてみました。

はたして、「野蛮の豪奢」や「エデン」は、サイバーショットにどう採録されたでしょうか。ゆっくりとご覧ください。



